様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月　１ 日現在

機関番号：１２３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ００６３８

研究課題名（和文）関連性理論に基づいたオクシモロンの解釈に関する認知的研究

研究課題名（英文）A Relevance-theoretic Account of Oxymoron

研究代表者
井門　亮（IDO, Ryo）

群馬大学・情報学部・教授

研究者番号：９０３３４０８６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,000,000円

研究成果の概要（和文）：オクシモロンとは、「小さな巨人」や「公然の秘密」といった矛盾関係や反義関係にある語を結合した修辞表現である。矛盾関係にある語が結びつけられているため、オクシモロンを言語的な意味で捉えると当然矛盾が生じることになるが、聞き手はそこから話し手の意図した意味を自然と解釈することができるのである。本研究ではそういったオクシモロンの解釈プロセスを中心に、関連性理論で提案されているアドホック概念構築や飽和といった明意復元のための推論作業に焦点を当てて検討を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、これまで様々な言語表現・現象に対して行われてきた分析と同様に、関連性の原理に沿った発話解釈分析の可能性を広げるものになる。さらにアドホック概念構築という語彙解釈に関する推論作業が、オクシモロンという修辞的表現の解釈プロセスに対しても重要な役割を担っているということを明らかにしたことで、関連性理論・語彙語用論の理論的な可能性の拡大のみならず、レトリック研究に対する貢献も期待できる。

研究成果の概要（英文）：Oxymoron is a figure of speech which combines two contradictory or incongruous words in encoded meaning, such as "a true lie," "More haste, less speed," and "Little big man". Such expressions are semantically incompatible, but the hearer can interpret what the speaker intends to communicate. Within the framework of Relevance Theory, it is claimed that the concept linguistically encoded by word may be pragmatically adjusted as a part of the pragmatic process of interpreting the speaker's intended meaning. This inferential process is called ad hoc concept construction and contributes to the recovery of the explicit content of utterance, i.e. the explicature. In this research, we are concerned with oxymoron based on the Relevance Theory and explain how the inferential processes of recovering the explicature, such as ad hoc concept construction and saturation contribute to the interpretation of this figure of speech.

研究分野：人文学

キーワード：オクシモロン　関連性理論　アドホック概念構築

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（１）本研究の分析対象であるオクシモロン（撞着語法・対義結合）とは、「小さな巨人」や「公然の秘密」といった反義関係や矛盾関係にある語を結合したレトリックである。そのためオクシモロンを字義通りに解釈すると矛盾が生じることになる。しかし実際の解釈で私たちは矛盾を感じることなくその意味を理解することができるのである。さらに「負けるが勝ち」「急がば回れ」のように、オクシモロンには諺や格言としてその意味が定着しているものも多い。オクシモロンはメタファーなどに比べるとまだ十分な分析がなされていないものの、こういった言語的意味と実際の解釈のずれを中心に、意味解釈の面で興味深いテーマであると言える。

（２）本研究の理論的基盤となる関連性理論（Sperber and Wilson 1986/1995）は、不十分な情報しか記号化していない発話から、聞き手はどのように話し手の意図した意味を推論しているのか、その解釈プロセスの解明を目指した理論である。この理論では、明意と暗意の復元やコンテクストの選択といった発話解釈に必要なすべての側面が関連性の原理に基づいて行われると主張している。

本研究ではオクシモロンの解釈に関しても、関連性の原理がかかわっていると仮定して分析を進めるが、関連性理論の枠組みでも、主に「アドホック概念構築」という明意復元のための推論プロセスを中心にオクシモロンの解釈について検討を行う。明意とは、記号解読から得られる解読的意味を推論によって発展させた明示的な意味のことであり、その発展には、曖昧性除去、飽和、自由拡充、アドホック概念構築という推論作業が含まれる。アドホック概念構築は、記号化された語彙概念が話し手の意図した意味へと語用論的に解釈される推論プロセスを指し、語彙概念を拡張して解釈する場合と縮小して解釈する場合に分けられる。

これまでアドホック概念を援用し様々な言語表現や語彙概念の解釈に関する分析が行われてきている（Wilson and Carston (2007) など）が、オクシモロンで用いられた語の解釈に対しても、アドホック概念が適用できるのではないかと考え、本研究の着想に至ったのである。

２．研究の目的

（１）関連性理論における語彙解釈研究の目的は、ある語によって記号化された概念と、その語によって伝達される概念は異なる場合が多いという事実を説明することにある。つまり、ある語が記号化する意味と、その語を使って実際に話し手が伝えようと意図した意味の間にあるずれを、聞き手はどのように調整して解釈しているのか、その仕組みの解明を目指しているのである。

この目的をより具体的に表したのが、語彙解釈に関する次の４つの問いである。

・語によって記号化された意味のままで解釈するのではなく、何がきっかけとなって語彙的調整（語の記号化された意味から話し手の意図した意味への推論）が行われるのか。
・何がその語彙的調整プロセスのたどる方向を決定するのか。
・具体的にその語彙的調整プロセスはどのように機能するのか。
・どこまでその語彙的調整を行うのか。

（２）本研究の目的は、（１）で挙げた４つの問いに基づき、日・英語のオクシモロンの解釈の仕組みについて、関連性理論の観点から認知的分析を試みることにある。特に関連性理論で提案されているアドホック概念構築という明意の復元にかかわる語彙解釈の推論プロセスを中心に、字義通りで捉えると矛盾が生じてしまうオクシモロンで用いられた語の意味が、聞き手によってどのように解釈されるのか検討する。

さらに語レベルから文レベルでのオクシモロンの解釈へと分析を展開し、それらに対しても同様にアドホック概念構築の観点からの分析が可能か、または飽和や自由拡充といった明意復元のための別の推論作業がかかわっているのか、明意ではなく暗意のレベルで説明すべきか、といった点について考察を行う。またオクシモロンが用いられた諺の解釈や、オクシモロンが持つ修辞的効果についても関連性理論の枠組みから明らかにしていく。

具体的には関連性理論の観点から以下の４点を中心に検討し、オクシモロンの解釈プロセスの解明を目指す。

・オクシモロンが容易に理解される解釈プロセスとはどのようなものだろうか。
・オクシモロンが伝える意味とはどのような性質のものだろうか。
・すでに慣用化している dead oxymoron の解釈はどのように説明できるのだろうか。
・オクシモロンの修辞的効果は関連性理論の観点からどのように説明できるだろうか。

３．研究の方法

（１）まず研究目的を達成するための準備段階として、語用論、意味論、レトリック研究など言語学の各分野におけるオクシモロンに関する先行研究を確認し、本研究の基盤を構築する。さらに語彙意味論を中心とした反義関係などの議論も踏まえて日・英語のオクシモロンの用例を収集し、アドホック概念構築の観点から整理する。

（２）オクシモロンで用いられた語の解釈について、関連性理論で提案されているアドホック概念構築という推論作業がどのようにかかわっているのか具体的に考察する。そして、分析結果と語用論、意味論、レトリック研究などの先行研究の主張を踏まえ、オクシモロンの解釈に関する新たな認知モデルを構築する。

（３）上記（２）の語レベルでの分析から、文レベルでのオクシモロンの解釈プロセスに分析を拡大し、文レベルでのオクシモロンの解釈についてもアドホック概念構築の観点から分析が可能か比較・検討を行う。それと同時に、明意復元のための推論作業である飽和や自由拡充とのかかわりや、暗意レベルでの解釈の可能性についても検討する。またオクシモロンには「負けるが勝ち」「急がば回れ」のようにすでに諺として定着しているものも多いことから、そういった定着した表現の解釈についても、同様の説明が可能か検討する。

（４）以上の分析結果を踏まえ、オクシモロンの意味を別の言葉を用いて言い換えた場合には失われてしまうような修辞的効果について、関連性理論で提案されている明意・暗意の強弱、認知効果と処理労力といった観点から検討を行う。

４．研究成果

（１）オクシモロンとは、例えば「小さな巨人」や「公然の秘密」といったような矛盾関係や反義関係にある語を結合した修辞表現である。矛盾関係にある語が結びつけられていることから、オクシモロンを文字通りに解釈すれば当然矛盾が生じることになる。しかし実際の解釈では矛盾をきたすことなく、瀬戸(1997)が「第三の意味」と呼ぶような、話し手が伝えようと意図した意味を聞き手は自然と理解することができるのである。本研究ではそういったオクシモロンの解釈プロセスに注目し、関連性理論で提案されているアドホック概念構築や飽和といった明意復元のための推論作業に焦点を当てて検討した。

　それでは上で述べたようなオクシモロンが伝達する意味とはどのような性質のもので、なぜ私たちはその意味をいとも容易に理解してしまうのだろうか。この点について佐藤(1987:227-228)は、論理的にはナンセンスであるオクシモロンがきわめて有効な表現を成立させるのは、「言語においては≪語≫の意味が弾力をもつ」ためであるとし、語の意味するものが「その都度自動的に伸縮し、適切に焦点を結ぶからである」と述べている。そしてそういった語の意味の伸縮性を「意味の弾性」と呼んでいる。この点については野内（2005）などにも同様の記述があるが、意味の伸縮性が解釈の際に具体的にどのように機能するのかは明らかにされていない。

　こういった伸縮性を持つ一方で、オクシモロンには「急がば回れ」や「負けるが勝ち」など諺や成句としてすでに慣用化（定着）しているものも多い。また諺として用いられるオクシモロンは、定着した表現であるにもかかわらず、同じ内容を文字通りの表現で言い換えた場合と比べてインパクトがあるとされる。Arii(1990)はそのような定着したオクシモロンを特に dead oxymoron と呼んでいるが、あるオクシモロンが成句として定着しているならば、そこで用いられた語や句全体の意味も固定されていると考えられるだろう。そうすると dead oxymoron の解釈についても、佐藤(1987)が言うような語の意味の弾性・伸縮性という観点から捉えることができるのかという疑問が生じる。もし説明できないのであれば、どのようなプロセスを経て dead oxymoron は解釈されるのだろうか。

　以上のような先行研究からの疑問を踏まえ、本研究では関連性理論に基づき次の４点を中心に分析を行った。

・オクシモロンが容易に理解される解釈プロセスとはどのようなものだろうか。
・オクシモロンが伝える意味とはどのような性質のものだろうか。
・すでに慣用化している dead oxymoron の解釈はどのように説明できるのだろうか。
・オクシモロンの修辞的効果は関連性理論の観点からどのように説明できるだろうか。

　これらの４つの疑問に対して本研究を通してどういったことが明らかになったのか以下で見ていく。

（２）まず１点目と 2 点目の「オクシモロンが容易に理解される解釈プロセスとその意味の性質」については、通常の発話解釈と同様に、「関連性理論に基づく解釈手順」に沿って関連性のある解釈を求めて推論が行われていると考えられる。この手順に基づき、言語的に記号化されたオクシモロンの意味から、聞き手は最適の関連性を求めて話し手が伝達しようと意図した「第三の意味」を推論しているのである。なぜならオクシモロンの言語的意味には明らかな矛盾が含まれるため、聞き手にとって関連性のある解釈ではない可能性が高いからである。また関連性理論では、この推論プロセスが無意識的・自動的に、そして瞬時に機能するものとしていることから、言語的な意味では矛盾しているオクシモロンから、聞き手が話し手の意図した意味を容易に理解してしまうことも不思議ではないだろう。つまり聞き手は、最適の関連性を求めて話し手が伝達しようと意図したオクシモロンの「第三の意味」を、無意識的・自動的に、そして瞬時に推論しているのである。

その結果導かれるオクシモロンの解釈は、オクシモロンの言語形式を保持しつつ、その意味を発展させたものと捉えられることから、関連性理論で「発話によって言語的に記号化された意味を推論によって発展させたもの」と定義される明意に関わるものと考えられる。その明意解釈のための「発展」がそれぞれのコンテクストで、関連性理論に基づく解釈手順に則って自動的に行われていることを、先行研究では「意味の弾性」と呼んでいるのである。ただしその「意味の弾性」には、アドホック概念構築を通してオクシモロンで用いられた語自体が「発展」する場合と、飽和によってその語に何らかの要素が補われて「発展」する場合の2つが考えられるだろう。アドホック概念が関わる場合は、オクシモロンを構成する2語、または片方の語にアドホック概念を構築して復元された明意の解釈によって、記号化された意味に見られた矛盾が解消されることになる。一方飽和が関わる場合は、記号化された語の意味に何らかの要素が補われることで、オクシモロンの言語的な意味での矛盾が解消されるのである。ただしオクシモロンの解釈にいずれのプロセスが適用されるにせよ、関連性のある解釈を求めて聞き手が推論を行い、話し手の意図した明意を復元しているということに変わりはないのである。

3点目の「すでに慣用化している dead oxymoron の解釈」については、上述のようにアドホック概念構築や飽和といった明意復元のための推論プロセスが関わっているものとして分析が可能か、またはすでに定着した表現であるため、記号化された意味として解読レベルで捉えるべきか検討を行った。また定着したオクシモロンがある一方、それらとは対照的に、文学作品などで用いられた創造的な（新奇な）オクシモロンも存在する。それらは普段の会話ではほとんど耳にすることはないが、コンテクストを吟味することで文学的で創造的な解釈にたどり着くことができるようなオクシモロンである。本研究では、定着しているオクシモロンと創造的なオクシモロンとの比較検討を通して、両者の解釈プロセスともアドホック概念の構築を基にした明意の解釈に関わるものであることを明らかにした。ただし定着したオクシモロンの解釈については、使用が重ねられることによって推論プロセスから復号化のプロセスへと移行している可能性もある。この点については関連性理論の枠組みでも、当初は推論によってアドホック概念として解釈されていた語の概念が、使用が重ねられるにつれて、次第に符号化された概念として語彙化される可能性が指摘されている。そういった主張からも両者を別々のタイプのオクシモロンとして捉えるのではなく、創造性の程度において連続体を形成していると考えるべきであろう。

最後に4点目の「オクシモロンが持つとされる修辞的な効果」については、関連性理論で提案されている明意・暗意の強弱、認知効果と処理コストといった観点から分析を行った。そういった修辞的な効果は、別の言葉を用いて言い換えた場合には失われてしまうものであるということや、他の修辞的表現と同様に、暗意の強弱という観点からの説明が可能であるということは明らかになったが、十分な結論にまでは至らなかった。

（3）研究期間全体を通して、上述した4つの疑問を明らかにするという目的のうち、オクシモロンの解釈プロセスに関する3つの目的についてはおおむね達成できたと言える。オクシモロンの解釈も、通常の発話解釈と同様に、関連性理論に基づく解釈手順に沿って関連性のある解釈を求め、記号化された意味を、アドホック概念構築や飽和といった推論によって発展させていると考えられるのである。また本研究によって、これまで様々な言語表現・現象に対して行われてきた分析と同様に、関連性の原理に沿った発話解釈分析の可能性を広げることができたと言えるだろう。

一方、オクシモロンが持つとされる修辞的効果に関する分析については、上述の通り十分な検討ができなかったため、今後の研究課題にしたいと思う。他の修辞的表現との比較も含め、その効果がどのように説明できるのか、引き続き関連性理論で提案されている明意・暗意の強弱、認知効果と処理コストといった観点から分析を行いたいと考えている。

＜引用文献＞

① Arii, Matsuo (1990) “Rhetoric as Resistance: Oxymoron and Hypallage,” 筧壽雄教授還暦記念論集編集委員会（編）『ことばの饗宴』631-648, 東京：くろしお出版.

② 野内 良三 (2005)『日本語修辞辞典』東京：国書刊行会.

③ 佐藤 信夫 (1987)『レトリックの消息』東京：白水社.

④ 瀬戸 賢一 (1997)『認識のレトリック』東京：海鳴社.

⑤ Sperber, Dan and Deirdre Wilson (1986/1995) *Relevance: Communication and Cognition,* Second Edition, Oxford: Blackwell.（内田 聖二・中逵 俊明・宋 南先・田中 圭子（訳）(1999)『関連性理論：伝達と認知』東京：研究社.）

⑥ Wilson, Deirdre and Robyn Carston (2007) “A Unitary Approach to Lexical Pragmatics: Relevance, Inference and Ad Hoc Concepts,” in Noel Burton-Roberts (ed.) *Pragmatics,* 230-259, Basingstoke: Palgrave Macmillan.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 井門亮	４．巻 27
２．論文標題 オクシモロンに関する一考察　ー関連性理論の観点からー	５．発行年 2020年
３．雑誌名 群馬大学社会情報学部研究論集	６．最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関